

# 狐の嫁入

野村胡堂

一

「親分、面白い話があるんだが——」

ガラツ八の八五郎は、木戸を開けて、長んがい顔をバアと出しました。

「あ、驚いた。俺は糸瓜へちまが物を言ったかと思つたよ。いきなり長い顔なんか出しゃがつて」

銭形平次は大尻端折の植木の世話を焼く恰好で、さして驚いた

様子もなく、こんな馬鹿なことを言うのです。それが一の子分が  
ラッ八に対する、何よりの好意であり、最上等の歓迎の辞じである  
ことは、ガラッ八自身もよく心得ておりました。

「ジョ、冗談でしょう。糸瓜が物を言や、唐茄子とうなすが浄瑠璃じょうるりを語る」  
「面白い話てえのはそれかい、八」

「混ぜっ返しちやいけませんよ。親分が糸瓜に物を言わせるから、  
あつしは南瓜かぼちゃに浄瑠璃を語らせたんで——」

「大層こんがらがりやがったな、——ところでその面白い話てエ  
のは何だい」

平次は縁側に腰をおろすと、煙管の雁首がんくびで煙草盆を引寄せまし

た。

あまり結構でない煙草の煙が、風のない庭にスーッと柵引くと、形ばかりの糸瓜の柵に、一朶だの雲がゆらゆらとかかる風情でした。

「狐の嫁入なんですがね、親分」

「狐の嫁入？——娘のおチュウを番頭の忠吉に嫁めあわ合せるといってお伽話とぎばなしの筋なら知っている」

「そんな馬鹿馬鹿しい話じゃありませんよ。何しろ町中の物持が大概たいがいやられたんだから、この筋書は容易じゃありませんよ」

「独りで呑み込まずに、さっさとブチまけてしまいな。狐の嫁入がどうしたんだ」

平次も少し乗気になりました。この話はどうかやら筋になりそうです。

「ツイ十日ばかり前から、荒川堤づつみで狐の嫁入がチヨイチヨイおこなわれるんですよ」

「おこなわれるは変だね」

「最初はちょうどこの月の始め、雨のシヨボシヨボ降る晩でした。戌刻半いっつごろ小台の方から堤つつみの上に提灯が六つ出て、そいつが行儀よく千住の方へ土手を練ったんで、川向うの尾久おぐは祭のような騒ぎだったそうですよ」

「川向うが騒いで、小台の方じゃ騒がなかったのかい」

平次は早くもガラッ八の話の中から疑問をたぐりました。

「そこですよ親分。尾久の方からは、川向うの土手を、提灯が六つゆらりゆらりと練って行くのが見えるが、土手下の小台の方からは、たった一つもそんなものが見えなかつたというから不思議じゃありませんか」

「フーム、器用なことをするおコンコン様だね」

「王子が近いから、いずれ装束しょうぞく稲荷いんぎの眷族けんぞくが、千住あたりの同類へ嫁入するんだらうてえことでその晩は済んだが、驚いたことにそれから三日目の晩、また雨のシヨボシヨボ降る日、こんどは先まのよりでつかい狐きつねの嫁入よめいりがあつたんです」

「どうしてでっかいと解った」

「その時は提灯が倍の十二でさ、土手を十二の提灯が行儀よく練るのが川に映うつってそりや綺麗でしたよ」

「お前はそれを見ていたのかい」

「あっしが見たのは三度目ので」

「三度もあつたのかい」

「だからお話になりますよ。——それから五日目の昨夜、昼頃からあつら誂えたようなシヨボシヨボ雨になったでしょう」

「フーム」

「尾久の友達が前から、打合せてあつたんで、大急ぎで出かけま

した。こんな晩はまた狐の嫁入があるかも知れない、なかつたら向う川岸を眺めながら、夜っぴて飲もう——てえ寸法で」

「呆れた野郎だな。その友達あきというのは誰だい」

「尾久の喜八で、いい年をして居るくせにろくな捕物をしたことはないが、酒は滅法強い」

「何んて口をきくんだ。それから何うどした」

平次はこの狐の嫁入話が、すっかり気に入った様子です。

「待つほどに酔うほどに」

「気取らずに筋を通しな」

「何しろ日が暮れる前からやって居るでしょう。亥刻よつ近くなつて、

好いかげんトロリとしていると、川向うにチラと明るいいものが出て来た」

「――」

「喜八の家は坐っていて釣つりの出来るのが自慢で、川向うの狐の嫁入見物には、これほど結構な棧敷さじきはない」

「それからどうした」

「シヨボシヨボ雨の向う川岸へ出た提灯の数は、何んと今度は三倍の十八じゃありませんか。それが六つずつ三つになって、行儀よく千住の方へ練ねるから見物みものでさ」



狐の嫁入



©2017 萩 柚月

「お前はそれを黙って見ていたのか」

「その辺に舟はなし、川へ飛込んだところで、親分が知ってなさる通り徳利でしょう。仕方がないから指をくわえて、喜八と二人であれよあれよ」

「間抜けだなア、何んだって宵のうちから向う川岸に廻って、狐の嫁入を見極めなかつたんだ」

「向う川岸の小台の方からは、提灯が一つも見えなかつたということから不思議じゃありませんか。——小台の衆は、尾久の奴等は臆おく病びょうだから、そんな物を見るんだらうと言うと、尾久の手合は口惜しがって、何を小台の寝呆ねぼけ野郎——という騒ぎで、こいつは何

時まで嘯み合せても埒らちはあきませんよ。幸いあつしがこの眼で見  
たんだから、狐の嫁入が本当に通ることには間違ひありません」  
「話はちよいと面白いが、それつきりじゃ仕様がな。お狐にし  
ちゃ手数がかかるから、いずれは誰かの悪戯いたずらだろう。提灯屋が喜  
ぶだけの事さ」

平次は軽く片付けて、もとの植木の方へ、注意が外れて了しまいそ  
うです。

「親分、話はこれからですよ」

ガラッ八は乗出しました。低い鼻が少しばかり蠢うごめきます。

「たいそう手数のかかる話じゃないか。早く筋をブチまけて了いな」

平次は不精無精の顔をネジ向けました。

「狐の嫁入見物で、どの家も空っぽになったところへ、空巢狙いあきすが入ったんで」

「何んだ、そんな事か」

「物持と思われる家は、大抵やられましたよ。尤も動もつとけない老人や病人が仕様事なしに留守番をしている家は助かりましたがね」

「たいそう手数のかかる空巢だが、余つほど盗られたのか」

「盗られた家は七八軒。金は田舎のことだから、五両か十両でしようが、品物は随分やられましたよ」

「三代前から伝わった紋附といったような品だろう」

「それから生物——」

「牛かい、馬かい」

「人間なんで」

「人間？」

「清水和助という町一番の大地主で、苗字みょうじまで名乗る家の掛かり人うど、お夏という十八になる娘が盗まれましたよ」

「フーム」

「あつしが見たわけじゃありませんが、綺麗な娘だったそうですよ」

「それから」

「それつきりで、尾久の喜八も、——こいつはこちとらの手に了おえないから、銭形の親分にお問い合わせするようになって」

「それで尾久から飛んで来たのか」

「へエ——」

「馬鹿だなア、そんな事は尾久で調べ上げれば、半日で解るのに」  
「半日や一日じゃ解りませんよ」

「急所を外れるからいけないんだ。例えばあの辺から江戸へかけて質屋しちやを張らせるとか、提灯屋を当って見るとか」

「喜八の子分が暗いうちに手を廻しましたよ」

「提灯を十八も揃えるには、一人で二つずつ持っても、九人の手が要るだろう。多勢組んでいる悪者を捜し出せば、思いの外早く埒あてがあくじゃないか」

「九人組なんて大袈裟おおげさなのはありませんよ」

「他に手の付けようがあるものか。——尾久の喜八あにい兄あにい哥あにいが宜いよ  
うにするだろう。放っておくが宜い」

銭形の平次は余り相手になりたくない様子です。

「でも、親分。喜八は飲みっ振りも、気前も良い男ですよ」  
「呆れた野郎だ。いやに喜八兄哥の肩を持つてると思ったら、そんな事なのか」

「頼みますよ、親分。せつかく喜八があんなに言うんだから」  
「じゃ手前だけ行って見るが宜い。どうしても手に了えなきゃ、その時俺が行ってやろう」

尾久まで乗出すのは、さすがに気がさしたか、平次は容易に御み輿こしをあげようとしません。

ガラッ八は強たつてとも言い兼ねた様子で、そのまま引返しました。



それから二日、まぎ紛れるともなく御用にかまけて紛れていると、

「た、大變ツ、親分」

ガラツ八の大變がまげぶし鬚節を先に立てて舞い込んだのです。

「何をあわてるんだ。——尾久から大變の百万遍をやつて来たんじゃないあるまいな」

「親分、落ち着いていちゃいけませんよ。大變な事が始まつたんだ。あつ喉がかわ涸く、水を一杯——」

「お静、八が水を欲しいとよ。そんな小さい茶碗で間に合うものか、ておけ手桶ごと持って来るが宜い。——さア、いったい何が大變なんだ、話してみるが宜い」

「人間が二人やられて、その上清水の息子が行方不知しれずになりましたよ」

「成程そいつは大変だ。詳しく話くわして見ろ」

「詳しくにもぎ、つにも、これつきりですよ。村のあぶれ者で、小博奕ぼくちと強請ゆすりを渡世のようにしている照吉と伊太郎というのが、尾久の土手で斬られて、ひどい死様で——」

「フーム」

「その晩、地主の清水和助の一人息子、清次郎という糝粉しんこで拵こさえたような息子が行方不知になったんで」

「ゆうべは狐の嫁入はなかったのか」

「あいにく雨が降らなかつたせいか何んにもありません。尤ももつと狐の方でも三人娘を嫁にやってあとは品切れになつたのかも知れませんがね」

「無駄を言うな、とにかく行つて見ようか、少し遠いが」

「有難てえ、そう来なくちゃ——」

ガラツ八の八五郎は、額を叩いて先に立ちました。神田から尾久まで二里に余る道ですが、斯こう調子づくると、八五郎は調法なことにほとんど疲れを知らぬ人間です。

尾久の土手へ行つて見て、さすがに平次も驚きました。田舎のことで、検屍の手が廻らないのか、二人の死骸は筵むしろを掛けたまま、土地の御用聞の喜八が頑張つて、一生懸命弥次馬を追つ払つておりますが、まだ八州の役人も顔を見せず、江戸の御用聞の平次が来ても、遠慮しなければならぬほどの人間は一人もおりません。

「お、錢形の」

喜八の顔には、救われた者の喜びが漲みなぎりました。

「尾久の兄哥あにき、久し振りだったな。相変らず達者で良いね」

「達者なのは口と酒ばかりだ。見てくれ、この通り血の海だが、

俺じゃ手の付けようはねエ。八州の役人が来ないうちに目鼻を付けなきや、又またうんと小言を言われるだろう。それに他の御用聞に嗅ぎ出されて、馬鹿にされるのも業腹しょうはらだ。銭形の兄哥なら——」

喜八がそう言うのも無理はありません。千住の先は江戸の町奉行の管轄かんかつでなく、言わば平次は縄張り違いですが、この老御用聞を救ってくれるのは、功名に恬淡てんたんな平次の外にはありそうもなかったのです。

尾久の喜八は土地に根を生はやした良い顔には相違ありませんが、喧嘩の仲裁、もめ事の調停なら知らず、むずかしい捕物となると全くの苦手で、血を見るときもう手も足も出ないような、御用

聞離れのした男でした。八五郎を拝んで、平次を引出したのは、土地の仲間<sup>さくら</sup>にこの功名を喋<sup>さ</sup>つて行かれ度<sup>た</sup>くないばかりの苦策<sup>くさく</sup>だったのです。

「それじゃ、ちよいと覗かして貰おうか。成程こいつは？」

平次は筵<sup>むしろ</sup>を剥いで見て驚きました。照吉と伊太郎はどっちも三十五六、典型的な安やくざですが、実に眼も当てられぬ凄まじい死にようをして居るのでした。

わけでも伊太郎は全身数十カ所の傷を受け、最後に左の胸を突かれたのが致命傷で、膾<sup>なます</sup>のようになってこと切れ、照吉はほんの二三カ所のかすり傷を受けただけ、その代り見事な袈裟<sup>けさ</sup>掛けに斬

られて死んでおります。

「錢形の兄哥、もうお役人の見える頃だ。この場の恰好だけでも付かないものだろうか」

喜八は独りで気を揉もんで居りました。

「待ってくれ、——この場の恰好だけなら、何んとか付くだろう。その代り後で様子が違っても構わないだろうな」

「構わないとも」

「もう一つ、念のために二人の懐を洗ってくれ。金は持って居ないだろうと思うが——」

「不断百も持っていない人間だが、この二三日馬鹿に景気がよく

て、伊太郎などは近在の賭場とばを門並み荒して歩いたそうだよ。――

――何んでも金の実なる木を植えたとか言つて」

「ところが、伊太郎は財布さいふも紙入も持つちやいねエ」

「おや、変なことがあるものだね、銭形の」

「大方そんな事だろうと思つたよ」

「――」

そんな事を話しているところへ、土地の御用聞に案内させて、検屍の役人が乗込んで来ました。

「ひどい事をするな。――下手人の目星は付いたのか、喜八」

役人も現場の虐むじたらしさに、ひどくタジタジとなっております。



「へエー、大概見当は付いた心算つもりでございます」

喜八は平次に教えられた通り、ひどく簡単に答えました。

「どう付いたんだ」

「伊太郎と照吉は無二の仲でしたが、近ごろ伊太郎が何にかで儲もうけた様子で、パツパして居りました。多分ゆうべここで出でつ逢くわして、照吉が無心を吹っ掛け、それを聴かなかつたので喧嘩になつたのでございましょう」

「フーム」

喜八の鑑定の要領のよさに、役人も、役人といっしよに来た御用聞たちも釣つり込まれてしまいました。

「二人はここで、人交えもせず斬り合つて居るうち、伊太郎の斬つた刀と、照吉の突いた刀とが一緒になり、相討ちになつて死んだものでございましょう。その証拠には、二人の長脇差はこの通り血だらけで、一間とは離れずに死んでおります」

「フム」

「もし、誰か他の者が、この二人を斬つたとすれば、これだけの傷をつけたんですから、うんと返り血を浴びたことでしょう。その辺にマゴマゴしておればすぐ知れてしまいます。土地者には、この二人のあぶれ者を一緒に相手にして、見事に斬り伏せるような、そんな腕の立つ人間はありません」

喜八の説明はいかにもよく行届きます。それを口移しに教えた平次は、八五郎といっしょに役人達に背を見せて、群がる弥次馬を追っ払っております。

#### 四

「有難てえ。これで俺も坊主にならずに済んだよ、銭形の」  
役人と、役人について来た二三人の御用聞の後ろ姿を見送って、  
尾久の喜八はホッとしました。

「その代り、これからが大変だよ、喜八兄哥」

平次は引返してもういちど二つの死骸をあらた検めております。

「大変というと？」

「下手人をさが捜すんだよ。——それから狐の嫁入を仕組んだ野郎と、泥棒と、人さらいと」

「二人は相討で死んだんじゃないのか」

喜八の鼻はキナ臭く動きました。

「それは兄哥の顔をつぶさないようにこの場のがれの言い訳さ。相討なんかじゃない、立派な下手人があったんだ」

「誰だい、そいつは」

「あわてちゃいけない。俺は江戸の町方の御用聞だから、八州の

役人が頑張がんばって居ちや、いくら兄哥の手伝いでも仕事が出来ない。こう追っ払って置いて、それから仕事をはじめめるのさ」

「へエ——」

平次の話の意外さ、喜八はすっかり胆きもをつぶしてしまいました。「第一、昨日まで恐ろしく景氣のよかったという、伊太郎が百も持つちやいないだろう」

「フーム」

「小判は愚おろか鏝びたせん銭一枚入った財布を持つちやいない。照吉の方は財布は持って居るが一文なしだ」

「——」

「二人が死んだ後で、誰か伊太郎の懐ろを抜いたに違げえねえ。が、こんな虐むじたらしい死骸から財布を抜くのは通りすがりの人間でない事は確かだ」

「なるほど」

「それに、伊太郎の傷は前から突いた傷だが、照吉は後ろから大おお袈裟げさに斬られている。背の方が深く斬下げられているし、前は刃先が浅いから、こいつは間違いはない。こんな具合に前から斬るためには、踏ふみ台だいでもしなきゃなるまい」

「フーム」

「伊太郎は自分の胸を突かれながら、踏台をして照吉の肩先を斬

り下げたか。——照吉が大地に坐つて肩先を大袈裟に斬られながら、伊太郎の胸を突いたか」

「すると、どんな事になるんだ、錢形の」

喜八はすっかり圧倒されて了しまいました。

「照吉は伊太郎より、ぐんと腕が上だろう」

「その通りだ。二人が相討になつたと聞いて、照吉の野郎よつぽど運が悪かつたろうと思つたよ」

と喜八。

「照吉はほんのかすり傷を受けたただけだが、伊太郎は滅茶滅茶に斬られている。たぶん照吉は伊太郎の胸を一と突き、——首尾よ

く片付けてしまつてほつとしたところを、誰かに後ろから袈裟掛けさがけに斬られたんだらう」

「なるほどその通りだ」

平次の説明は痒いかゆところへ手の届くようでした。

「それだけは解つたが、照吉を殺して財布を抜いたのは誰か。それをこれから捜さなきやなるまい」

「？」

「養い娘を誘拐かどわかされた上、息子が行方不明になつたという、地主の清水のところへ行って見ようか。——八、お前は喜八兄哥の身内の衆に案内して貰つて、土地の質屋と両替屋を片っ端から調べ



てくれ。品物は隠して置くかも知れないが、空巢稼あきすぎで金を盗んだ奴は、三日と費つかわずにいる気遣いはねエ」

「へエ——」

八五郎は喜八の子分を二三人狩り出して、八方に散りました。二つの死骸はもう検屍が済んで、町役人に引渡したのです。

## 五

清水和助というのは、尾久の半分ほども持っていると言われた大地主で、先代は苗字帯刀みょうじたいとうを許されたほどの大百姓ですが、和助

は養子で、早く女房に死に別れた上、なんの因果か子供運がなく、たった一人の男の子で、二十三になる清次郎というのを、杖とも柱とも頼む贅沢なうちにも淋しい生活でした。

尤も親類から預ったお房という二十歳の娘があり、世間ではそれを清次郎にめあわ娶合せることとばかり思い込んで居りましたが、どうしたとかそんな様子もなく、半年ほど前から清水家に掛り人になつている、お夏という十八になる娘と、この秋は祝言させるということに話が決つていたのでした。

「江戸の町方のお方？———そうですか。私は和助、倅の行方を突き止めて下すつて、無事に戻りさえすれば、お礼はどんなにでも

します。どうぞ、一骨折ひとつて見て下さい」

主人の和助は、喜八、平次の二人を迎えてこんな事を言うのです。五十前後の脂あぶらの乗った中老人で、物欲の旺盛おうせいらしいのと、何事も金で始末の出来ないものはないと思ひ込んでいる様子で、ひどく平次の癩かんにさわります。

「養い娘のお房さんというのがあるのに、どうして、そのお夏さんというのを嫁にすることになったんです」

平次の最初の問いはこう言ったものでした。

「お夏の父親は私の昔の友達で、恩がありますよ。それに、伴がお夏でなきやと言うので——」

和助の顔には苦渋くじゆうの色がアリアリと刻み付けられました。

「そのお房さんとやらに逢わせて下さい」

平次はこの欲の深そうな主人と長く話して居るのが鬱陶うっとうしくなつた様子です。

お房というのは二十歳というにしては少し老けた方ふで、決して綺麗ではありませんが、何んとなく智的な感じのする娘でした。

「お前さんはお房さんというんだね」

「ハイ」

お房は淋しく俯うつむ向きました。

「この家とどんな係り合があるんだ」

「私は旦那様の甥おいの娘で、遠い親類ですが小さい時両親おいに別れて、ここに引取られました」

「主人はよくしてくれるだろうね」

「それはもう」

弁解するような調子のうちに、何かしら悲しい語気が潜ひそみます。髪形ちも着ているものも、至つて質素で、若いにしては智的に見えるのは、そのためだったかも知れません。

「お前さんはこの嫁になる筈じゃなかったのか」

喜八は遠慮のない事を言いました。

「いえ、飛んでもない」

「すると、お夏が嫁になつても、不服はないわけだね」

「——」  
お房はうなずきました。

それから平次は主人の部屋、お夏の部屋、伴の部屋などを見せ  
て貰い、物置と納戸と土蔵まで念入りに調べさせて貰いました。

「まさか土蔵に隠れているような事はあるまい」  
と喜八。

「人間は隠れちゃいないが、——俺は提灯の数を勘定したんだ」  
平次は変なことを言います。

「提灯がどうしたというんだ」

「これ程の大家に提灯が二つしかないのを変だとは思わないか、  
兄あにき哥」

「そう言えばその通りだが——」

「狐が持出したかも知れない。とにかく、提灯を掛ける釘が十三  
遊んでいるよ」

二人は雇人やといにんたちに逢つて、お夏の身の上のことを訊きましたが、  
誰もくわ詳しく知ってる者はありません。

「親分」

清水の門を出ると、不意に声を掛けた者があります。

「あ、与よさまつ三松か」

喜八は鷹揚に挨拶しました。相手は四十年輩の堅気ともやくざ者ともつかぬ男。

「ちよいとお耳に入れたいことがありますか」

「ここで言うが宜い。——この人は俺の友達だよ。構わないとも」  
喜八は平次を友達にしてしまいました。幸い江戸を離れると、  
神田の銭形平次もあまり顔を知られてはいません。

「外じゃございませんが、——行方不知しれずになった清水さんの掛り  
人のお夏という娘のことを、何うかしたら、浪人者の大井半之助  
さんが御存じじゃありませんか」

「それはどう言うわけだ」



「親分は御存じじゃありませんか、——大井さんというのは、あの娘の後を慕って、ここへ来た人ですよ」

「——」

「お夏さんの父親は清水の旦那の若い時分の友達で、昔は江戸でいっしょに仕事をしたが、清水の旦那はすっかり残して尾久に引込んであの身上しんしょうを拵え、お夏さんの父親は、商売しくじりの縮尻しゆくじりから、二三年前首を釣って死んだという話ですよ」

「フーム」

「その娘を清水の旦那が引取ると、浪人者の大井半之助さんが附いて来て、近所に家を借りて見張しやうしんっているんです。大変な執心しやうしんで

すよ」

「有難う。それだけ訊くと大變役に立つ、——一つその大井とかいう人に逢つて見ようか、兄哥」

平次はさつそく新しい手掛りをたぐりました。

「無駄だろうと思うよ。浪人者と言っても、生っ白い弱そうな武家で、朝から晩まで本を読んだり歌を作ったり、女のするような事ばかりしている男だ。若い娘を誘拐かどわかしたり、腕っ節の強いやぐざを二人殺したりするような、そんなことの出来る柄じゃない」

喜八は頭から相手にしません。

「でも、武家は心得がありますよ。弱いようでも、いざとなれば、

こちとらの二人や三人はどうにでもなりませア」

与三松もなかなか主張がありそうです。

「じゃ行つて見るとしようか」

平次はその弱い武家に興味を持ち始めた様子です。

## 六

二人はすぐ近所にささやかな借屋住いをしている、浪人大井半之助を訪ねました。『弱い武家』で通っているだけに、二十五六の  
良い男ですが、きやしや華奢で柔和で、どう見ても人間をかどわか誘拐したり、や

くざ者を斬つたりする柄とは思われません。

「お聞きでしょうが、清水屋敷のお夏さんが行方不知になりました。旦那は前からお夏さんを御存じのようですが、お心当りはございませんか」

喜八の言葉は丁寧ですが、抜差しならぬ言質を掴つかもうとする意気込だけは猛烈です。

「知らない。——何んにも知らない。それで実は私も心配しているのだが——」

読みさしの本も手に付かない様子、腕を拱こまぬいて、青々した月代さかやきを見せます。

「お夏さんと、清水の旦那はどんな係り合いになつて居りましたよ  
う」

「その事ならよく知つて居る」

大井半之助の説明は長いものでしたが、一と口に言うと、今から二十五六年も前お夏の父石崎金次という浪人者と、今は清水の主人になつて居る和助が、江戸で落合つて懇意こんいになり、木曾きその御留山とめやまを伐り出きして巨万の暴富を積みました。

その後和助は尾久に歸つて清水の養子になり、持参金で財産を整理して、今日の大地主になりましたが、石崎金次はその後も清水和助の資本でいろいろの仕事を つづけ、二三年前旧悪が露見し

て、千住の宿で自殺して相果てました。

石崎金次の死には、かなり疑わしいものがありました。日蔭者の悲しさは、それを発あほき立てるわけにも行かず、娘のお夏はまもなく清水和助に引取られ、尾久の屋敷につれて来られて、和助の倅の清次郎が望むままに、嫁にすることになった様子です。

大井半之助は石崎金次の悪事を憎みながらも、その娘のお夏の美しさに引かされ、子供の時から親しくしておりましたが、お夏が尾久に引取られてからは、浪人者の気楽さ、後を慕ってここへ移り住み、蔭ながらお夏の安否を見護って居たのです。

「こんなわけだ。——これ以上の事は何んにも知らない。お夏が

逃げ出したものなら、自惚うぬぼれのようだが、この私のところより外に行く場所はない。ここへ姿を見せないところを見ると、多分悪者に攫さらわれたのであろう」

半之助はそう言って暗然と頭を垂れるのです。

平次と喜八は浪宅を出て二三十歩行きましたが、フト平次は立止って、

「どうかすると、あの家にいるかも知れない。行って見ようか、兄哥」

「何んだい」

「まア、見付けてからの事だ。この八卦けは当らないかも知れない

から」

二人はもとの大井半之助の家へ引返すと、一応断つて、裏の物置を開けて貰いました。

「この物置は滅多に使うことはあるまいね」  
平次は案内の婆やさんに訊きます。

「もと百姓家で使った物置だから、あんまり広くて役に立たねえよ。近頃は三月も開けたことがねえだ」

「そうだろう」

そう言いながら中へ入った二人、

「あつ」



喜八は思わず声をあげました。広い物置の隅に、各種各様の提灯が十七八、蠟燭ろうそくも抜かずに滅茶滅茶に積んであるではありませんか。

「こんな事だろうと思ったよ。狐の嫁入の道具が、やはり川の此方にあつたんだ」

平次はそれを予期した様子で一向驚く色もありません。

「縛ってしまおうか」

喜八は犇ひしめきます。

「誰を？」

「知れたこと、あの弱い浪人者だよ」

「冗談じゃない。自分が細工さいくした狐の嫁入道具なら、自分の物置へ隠しておくものか、あの浪人者を縛ると、飛んだ事になる」

「それじゃ？」

「もう少しあちこち歩いて見よう」

二人はまた川岸つぷちの方に取って返すと、八五郎と下つ引二人が勝誇かちほこった様子で飛んで来ました。

「親分」

「両替りようがえした奴が判ったか」

「皆んな判りましたよ。それから蠟燭を買った野郎も——」  
ガラッ八はすっかり弾はずみきつて居ります。

「なるほど、其処まで気が付けば大したものだ。ところで、そいつは、伊太郎か照吉か」

「あッ、親分も訊いて歩いたんで？」

「歩きはしないが、見当だけは付いているのさ」

「そんなによく解っているなら、あつしが汗を掻くまでもないでしょう」

「まあ怨むな。足で取った証拠でなきや、真実の証拠にならない」  
平次は八五郎を撫なだめながら、次第に川岸つぷちを遡さかのぼ上のぼって行き  
ます。

「何を捜すんだ、兄哥」

と喜八。

「あれだよ」

「こいつは、清水屋敷の舟だが？」

平次の指さしたのはこの辺の川を渡すのに使う舟で、何の変哲もなく、岸の杭つなに繋いであるのです。

「この舟で渡って、川向うの土手で狐の嫁入をやったのさ」

「この小さい舟に九人も乗ったかい」

喜八はまだ狐の嫁入行列を九人以下ではないと信じている様子です。

狐の嫁入

「いや、たった三人さ。その舟の中に三間以上の棹さおが三本もある

のは不思議だと思わないか」

「？」

「川舟の棹は大抵二本に決つたものさ。一本では流したとき困るが、三本は多過ぎるよ」

「その棹一本に提灯を六つずつブラ下げられるだろう。——最初の晩は一人でやったから提灯が六つさ。二度目は二人でやって、三度目は三人でやった。三人の人間が銘々提灯を六つずつブラ下げた棹を持って川向うの土手を歩いたから、此方こっちから見る人間は驚いたわけだ。——それも雨のシヨボシヨボ降る晩に限った。川向うの人達に見付けられたくないからだ」

平次の絵解きは奇抜ですが、今はもう何んの疑いもありません。「そう言えば提灯は六つずつ三ツ別々に揃っていたような気がする」

ガラツ八もその晩のことを思い出します。

「此方からだけ提灯が見えて、川向うの小台の方からは何んにも見えなかったのはどう言うわけだろう」

と喜八。

「俺には見当だけは付いているが、これも証拠がないからはつきりは言えない。——たぶん提灯一つに菅笠すががさ一つずつ下げて、向う側へ灯の見えないようにしたんではないかと思う。どこかに菅笠

を十八積んであるよ」

平次はそんな事まで考えて居るのです。

## 七

ここまで突き止めて、これから先はハタと行詰りました。

相変わらずお夏と清次郎の行方は解らず、伊太郎と照吉の相棒の見当も付きません。

日が暮れると、一応喜八の家へ引揚げて、平次と八五郎と二人、額を鳩あつめました。こうなると平次にもなかなか良い知恵が浮か

ばなかつたのです。

「たった一つ術てがあるんだが——」

平次は言いたくないことを言う様子でした。

「何でもやって見ようじゃないか、銭形の。考えがあるなら言うてくれ」

喜八は膝を乗出します。

「変なことを訊くようだが、この辺で俺の名前を知ってる者はあるだろうか」

平次は恐る恐るこんな事を言うのです。

「神田の銭形平次兄哥を知らない者があるものか。顔を知らなく



とも、名前だけは子供でも知って居るよ。身に覚えのある野郎は、  
銭形と聴いただけでも身顛みぶるいする」

気の良い喜八は立てつづけにこんな事を言うのです。

「そんなに煽おだてちゃいけない。じゃ——喜八兄哥の言うのを半分に聞いて、いよいよたった一つの術に取かかって見よう。——ここに居るだけの人数で、尾久一杯に触ふれ廻して貰いたいんだ」  
「何を触れるんだ」

「——神田の平次が来て、下手人の目星が付いたそうだから、明日は伊太郎照吉殺しも、お夏と清次郎の誘拐野郎かどわかしも縛られるに違いないとこう言うんだ」

「本当かい、そいつは」

「まア、本当にして置いてくれ。——髪結床、居酒屋、出来ることなら村中の者皆んなに聴かせ度たい」

「そんな事ならわけがあるもんか。サアもう一度皆んなで行ってくれ」

「合点だ」

子分達はゾロゾロと出動して行きました。

「あっしは？ 親分」

残ったのは八五郎と喜八だけ。

「さて、一番怪しいと思うのは誰だろう」

平次は妙な事を言い出しました。

「浪人者の大井半之助だ」

喜八は言下にこた応えます。

「川向うで嫁入行列をやったのは三人、その間に空巢狙いをやったのと、お夏を誘拐かどわかしたのが一人か二人ある筈だ。——そのうち

伊太郎と照吉は死んでしまった」

と平次。

「あと二人あるわけだね、親分」

「三人かも知れない。が、もう尾久には居ないだろう。一と晩五両十両の仕事になれば、江戸から稼かせぎに来るのはいくらでもある」

と平次。

「じゃ皆んな逃げたかもしれないというんで？」

八五郎は少しがっかりしました。

「いや一人だけは残っている。大事の仕事が残っている筈だ。——  
——そろそろ出かけて見ようか」

「何処どこへ——」

「ツイ其処そこだ」

平次は八五郎と喜八を誘さそって闇の中へブラリと出ました。

五六丁行くと、清水屋敷の前へ出ます。

「八と喜八兄哥あにきはここで待っていてくれ。入る奴を縛っちゃいけ

ない、出る奴を縛るんだ。誰でも構わない」

「親分は？」

「裏にいるよ。手剛てごわいから、怪我をしないように気をつけろ」

三人は二た手に分れました。

それから一刻ときあまり。

闇の中から湧いたような男が一人、清水屋敷の表からそつと入って行って、四半刻ほど経つと、もとの表口からあたり四方を忍ぶ様子でスルリと滑り出しました。

「御用ッ」

前後から飛び付いた喜八と八五郎。

「何をッ」

曲者は身をひるがえ翻すと、あいくちヒ首を抜いて、はんげき猛然と反撃して来ました。平次の注意がなかったら、二人のうち一人は間違いなくやられたことでしょう。

「神妙にせいッ」

危うくかわして、二人は呼吸を揃えて打ってかかりました。

も揉みに揉んで、ようや漸く縛り上げたとき、平次は家の中から、

「どうだ、無事に捕ったか」

のんき暢気そうに顔を出したのです。

「親分は」

「俺も一人縛ったよ、見るが宜い」

雨戸を一枚繰ると、部屋の中に、主人の和助を縛って引据ひきすえているではありませんか。

「そいつは、親分」

「曲者の一人さ。——お前たちの縛ったのは和助の子分の与三松だ。高飛びの路用を強請ゆすった筈だから、懐には二百や三百の金を持っているだろうよ」

「へエ——」

八五郎も喜八も開いた口が閉ふさがりません。

与三松を責めて、お夏は川向うの百姓家に隠していることが判

り、清次郎は千住の与三松の仲間のところ<sup>ところ</sup>に隠してあることが判りました。

すぐ様川向うの百姓家へ行つて、窶<sup>やつ</sup>れ果てながらも、透<sup>す</sup>き徹<sup>とお</sup>るように美しいお夏を救い出した時、念のために物置を見ると、どこから盗み溜めたか、菅笠<sup>すががさ</sup>が十八。

「あ、こいつだ」

ガラツ八は平次の慧眼にお辞儀をしてしまいました。

その晩のうちにお夏を浪人大井半之助に手渡ししてその保護に委<sup>ゆた</sup>ね、千住から和助の伴清次郎を救い出して、留守を預かるお房に引渡し、平次とガラツ八は尾久を去ることになったのです。



×

×

「親分、あの浪人者は喜んでいましたぜ」

帰る路々、ガラツ八はまた絵解きの緒口いとぐちをつくるのでした。

「お房も喜んでいるだろうよ」

平次は別の事を考えている様子です。

「清水和助は、何だつて与三松なんかゆすに強請ゆすられたんでしょ」

ガラツ八にはまだ何んにも解つては居なかつたのです。

「お夏をかどわか与三松に誘拐かどわかさせたのさ」

「へエ——」

「斯こうだよ、詳くわしく話そう。和助はお夏の父親の石崎金次と一緒

によからぬ事をして金を溜めたが、悪事が露見しそうになつて、今から三年前、与三松の手を借りて石崎金次を殺し、自殺と見せかけてお上の目を誤魔化ごまかした——それはいずれお白洲しらすで解るこ  
とだが。その後、自分の殺した石崎金次の娘お夏を引取つて、罪  
ほろぼしの心算つもりで養つていると、あの通りの縹緞きりようだから、伴の清  
次郎が夢中になつた。これは我儘いっぱいに育つた馬鹿息子で、  
何んとしても親の言うことを聴かない」

「へエ——」

「和助は悪党の癖くせに気が弱いから、伴の言いなり放題に、お夏を  
嫁にすることを承知したが、自分の殺した石崎金次の娘を、伴の

嫁にするのは何んとしても気が進まない。が、倅の清次郎はお夏の側にへばり付いて半刻も眼を離さないから、どうすることも出来なかつたのだ」

「――」

「丁度そのとき、狐の嫁入騒ぎが始まつた。悪党同士の推量すいりようで、あれは与三松の悪戯いたずらに相違ないと睨んだ和助は、与三松に提灯を貸してやって、狐の嫁入をうんと大きなものにし、空巢狙いと一緒に、お夏を攫さらわせることを思い付いた。あれだけの狐の嫁入が始まると、清次郎もジツと女の番人はして居られない」

「なるほどね」

「清次郎が狐の嫁入を見物に出た後、お夏を首尾よくさらった与三松は、今度は、お夏の隠れ家を教えてやるからと、和助の倅の清次郎をおびき出し、千住の仲間のところ<sup>に</sup>隠して、和助を強請<sup>す</sup>ったのさ。金を出さなきや清次郎を殺す<sup>と</sup>でも言ったんだらう」

「――」

「俺の名をエラそうに触れるのはイヤだが、うっかりするとどんな事になるかも知れないと思<sup>つ</sup>たからあんな術<sup>て</sup>を使<sup>つ</sup>て与三松を和助のところへや<sup>つ</sup>たのさ。大方見当は付<sup>い</sup>て居ても、証拠のないのを縛<sup>る</sup>わけには行<sup>か</sup>ないし、責<sup>せ</sup>めさいなむのはイヤだからなア」

平次は何時でもそんな事を考えて居るのでした。

「伊太郎と照吉が殺されたのは？」

「与三松の細工さ。——お夏を誘拐かどわかした礼に清水和助から貰った

金が五十や三十あつた筈だ。それを与三松は腕っ節が弱いくせに欲の深い伊太郎にやった。照吉は伊太郎から取上げようとし、伊太郎はやるまいとして斬あいになり、照吉は伊太郎を突き殺したところを、与三松は後ろから照吉を斬つて、懐ろの金を抜いた」

「いやアな事だね。——ところで清水の身上しんしやうはどうなるでしょう」

とガラツ八。

「いずれはお上で没収ぼつしゆうさ。だが、あのお房という娘は思いの外確しつか

り者だから、結構清次郎を立てて行くだろうよ」

「お夏はあの弱い浪人と一緒ですかえ」

「妬ねたむな妬むな、お前にはまだ良いのがあるよ」

平次はカラカラと笑いました。

江戸の街へ入るとすっかり夜が明けて、すがすがしい夏の朝風が頬を撫でます。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

狐の嫁入

初出―「オール讀物」昭和十五年八月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第六卷  
河出書房  
昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部





# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>